【翻　訳】

「風呂」

カレン・ヤマシタ　著
牧　野　理　英　訳

1.

家では，母親が風呂に特別な魅力を感じているとみながよく話していた。父親などは何年も前からそのことを話していた。おそらくそれはもっと頻繁に風呂に入ってもらいたいという母親の提案に対しての，父親の唯一の反論だったのかもしれない。思い起してみるに，父親は毎週土曜日の夜，週に一度しか風呂に入っていなかったようだった。父親は母親と過ごす夜の時のみに入る，週に一度の風呂を自慢していたのである。そして母親の朝風呂が何年間もの間，習慣となっているのと同じように，父親の母親と風呂に対する意見も，次第に大げさな表現を伴っていった。また母の風呂は突如朝に始まるので，父親は母親の習慣のいくらかは，自分に対する陰謀ではないかと思っているようだった。

母親はそうした父親の意見を否定するような人ではない。母親はこれに対し口をつぐんで床を見るという困惑した態度で自嘲する。父親の冷やかしは昔から頻繁なもので，母親はこれに対しおきまりの返答をせずに対応しなかったことはない。母親は二つの弁明で自分を正当化する。すなわち，熱い風呂は最も心身を和ませるものであるということ。そしてもう一つの口答えとは，体を清潔にするという必要性に対してのより弁護的な態度であった。

「汗をかくんだから，きれいな体にしておくことはいいことじゃない？そうすればもっと気持ちいいでしょ？」

「そもそも」母親はとうとうこんなことまで言うようになった。「風呂は私の唯一の贅沢なんです。」

こういった言い方は母親の典型的な言いまわしである。そしてその言いまわしにはある素朴さが込められていたが，これは母親が単純であるということではない。いや，決してそうではないのだ。むしろ風呂に入るということは，自分たちが何者であるのかということに対する必然性を尊重する感性であり，それは毎日の必要性に迫られている中でも満足感，時には贅沢さえも発見しうる実用的感覚なのだ。母親には格好をつけたり，何かを欲しがったり，また流行といったものをもたず，そしてそうした点において簡素

であった。父親が言うように「あいつはありのままなのだ」―。母親の素朴さは結局のところ飾り気のないものである。それはあたたかい風呂の中で，清潔で裸であるということなのだ。

風呂は子宮への回帰，あるいは胎児への回帰を時に暗示させる。母親はそのことが風呂に浸かる喜びの一部であることを躊躇することなく認めている。裸であることは母親にとって恥ずかしいことではない。生命の誕生とその身体は，とても自然で美しいものなのだ。しかしその誕生や裸体に関する変化，行動，要因に対する説明を母親から引き出すことは困難であった。そうしたことは母親にとって極めて理解しがたい謎なのである。母親のこれに対するいつもの答えとは「他の人が持っていなくて，自分がもっているものって何かしら？」と言うものであった。この問いは自然で神秘的なものすべてをなんとか満足させるものでなくてはならなかった。

風呂に関して言うならば，一家が家族として初めて生活した古い家の風呂が心に浮かんでくる。その風呂場はピンクのエナメルで全部塗装されているようだった。作り付けの木製の引き出しや，鏡の後ろにははめ込まれた大きな木製の薬の飾り棚があった。これらもピンクのエナメルで塗られていた。しかしそれよりも驚くこととは，バスタブそのもので，それは古い歪曲した四つの足で，リノリウム（床の仕上げ剤）が剥がされた床の真ん中に立っている大きな白い鉄製の豚のように見えた。

当時は3人―母親と双子―がこのバスタブで一緒に風呂に入った。母親は湯船の前でしゃがみ，湯加減を調節している間，二人の娘たちは母親の肩ごしにかがみこみ，お湯をバシャバシャかけあったり，ゴムのおもちゃやクリーム色の石鹸を湯船に浮かせたりした。母親は体を洗う布と石鹸をとり，自分と二人の子供の体をこすり，洗い流し，「垢」や浮カスが風呂に集まる前に子供たちを外へ出した。母親は，これを「いい加減」と言うやり方で，素早くいつものようにやってみせたのである。「いい加減」とは「ただそのように」とか「あなたのやり方で」とか「ただ十分に」ということである。「いい加減」とは何かのレシピで，塩やしょうゆをどれほど使うのかに関して，彼女の母親が使っていた表現であった。もし「いい加減」であるなら，それは常識や趣味の量のことを言う。「いい加減」とは母親が，書類の整理や，手紙をしたためたり，読書したり，そして子供たちの体を洗うといった家事に対して母親が持っている一般的なやり方を説明しているのだ。

でももし母親が「いい加減」に洗うとなると，洗髪は時には全く別な物になっていた。これは普段のやり方，すなわち頭皮の四つの面をごしごし洗うことにおいて「いい加減」というのではなくて，時折彼女が風呂に卵を三つもってきたりするという点において「いい加減」なのである。卵は冷蔵庫から出してきたもので冷えていた。双子は，母親が子供たちの濡れた頭の上で優しく冷たい卵の殻を割っている間，古い湯船の白い歪曲したところにもたれてかかっていた。黄身がおちて白身が耳や額，眉毛までだらだらと落ちていき，舌にまで落ちて味がわかるほどまでになっていた。そして「いい加減」に，母親は子供たちの黒い髪と黄色い卵を混ぜて，その頭皮をマッサージした。そしてこう言っ

た「私が小さい頃は，母さんがいつも卵で髪を洗ってくれたの。こうするときれいにピカピカになるのよ。」

その後，双子は母親なしで風呂に入った。そして母親の「いい加減」なやり方ではなく，風呂の時に連続しだんだん複雑になっていく儀式を自分たちで勝手につくりあげるようになった。その儀式とは大方二つの小さな体が，湯気にかすむそのピンクのエナメルの浴槽の両端に立って，突き出たおなかをかすめて通り，ぶつかりありながら，ヒステリックに笑いあうことで始まるものである。

「あたしのおなかのほうが大きいよ！ほら！！」
「あんたのおへそ見て！くすぐったいでしょ！」
「さわんないでよ！」

後で初等教育で習った成果を活用し，母親はこの双子の娘たちが“You Do the Hokey-Pokey”の一連を“You put your left foot in”から最後の“whole self”までやるのを見ていたものだった。当時，風呂はどちらかというと（このような遊びのために）生温かくなりがちであった。しかし母親が風呂に湯を入れると，彼女らの遊びの儀式は，「湯船の二人」といったように，前方や後方のシステムを作り上げることになっていく。つまり双子の一人が前に座り熱い湯にあたり，水を加え適度な間隔で「漕げ，漕げ，左に」と叫ぶ。その間後ろにいるもう一人はこちらへやってくる熱い湯，あるいは冷たい水をかきまわすのだった。時々「漕げ，漕げボート」を，新しい節で向きをかえながら数ラウンドを調整してやることもできた。これらの歌の最後には双子は作り上げた渦巻きの中にいて，湯が湯船の周辺にこぼれ，リノリウムの床が反ってしまうのだった。

泡風呂は風呂の時間における新しい挑戦でもあり，それは湯が最も大きくて層の厚い泡でかきまわされるように，例外的なほど繊細に漕ぐという技術を要していた。双子は白い泡の白い湯船の前と後ろに座って，動かず，息をしない。これは言ってみるならば，沈黙の風呂である。双子はあたかも混雑した中にいる人々のようにささやき，泡をつぶしてしまうといったへまに対して優しく叱ったりするのを互いに耳にしながらゆっくり動いた。今となってみると，長い風呂の時間で，体を洗うことは，夢中になってしまう主なこと（風呂で遊ぶこと）に対し比較的重要でない部分となってしまっていた。そしてその重要でないところにいきつく前に，二人が泡が静かに過ぎていくのを待っている状態であることがよくあった。

紅潮した，ふやけた小さな体がようやく風呂場からでてくると，双子は自分たちの灰色の「垢」が，大きな浮カスの輪になってたまっているのを目にし，湯が最後には小さな速く回る渦のなかに消えていくのを見に来ていた。古い湯船から長く吸引する音が，暗い錆びた排水口とその中心を越えて響いていく。双子は母親が一人で風呂に入るのをよく見にいった。双子はいつも母親が湯船に深く横になるのを眺め，湯船の中のなだらかな傾斜に対する曲線に母親の頭と肩が飛び出しているのが見えた。体を洗う四角い布が彼女の腹や髪のやわらかな塊の上に浮いていた。母親は「こっちへいらっしゃい，そ

して扉を閉めて，寒いでしょ」とよく言っていた。
双子は湯船の端にもたれかかった。一方がこういった。

「かあさん，おなかに傷があるんだね！　そこってあたしが赤ちゃんのとき出てきたところなの？」
「いいえ。これは盲腸をとったときのものよ。」
「ほら，あたしがそういったじゃない。」

風呂での母親を見るのは決してそれほどおもしろいことではなかった。母親は石鹸を沢山使うことなどなく，優しく肌をこすった。それはいつもの「いい加減」な，水平に体を湯につけたやり方だった。
父親の一週間の体からでてきたものが，石鹸とお湯の中でおびただしい量で広がっているのを見るのは（母親の入浴とは）全く異なる経験であった。父親は湯船の端に石鹸をもってすわり体全体に厚く白い泡をこすりつけた。父親はとても毛深く見えた。そして片方の足が悪く右の臀部に傷があった，それは傷痕のようで人の小さな手ほどの大きさであった。

「父さん。戦争で足怪我したの？」
「いいや。いたずらっ子だったから木から落ちたんだよ」
「へえー。」

父親の風呂で一番面白い部分とは，その毛深い石鹸の泡だらけの体を，深く白い湯の中に浸して，灰色の泡のすべてが波のように上がり，あごのところまで湯を跳ね上がっている状態を見ることだ。そして風呂から上がると，湯が父親の足元で波打ち，湯船が大きな音や，体の立てる音を反響させた。そして平らな足が風呂の床の鉄をたたき，こすり，すさまじい量の灰色の垢がでた。当時の双子には思いもよらぬことだったが，父親が石鹸を半分の大きさにまでして体を洗うのは，体を洗う布がどうやら風呂に入っている間中，足の間にゆったりと掛かっていることと関係があるらしかった。
風呂の儀式でおそらく極めて重要な才能をもっているのは祖母であろう。祖母が家にやってくると，双子は祖母が次に何をするのかを見ながら後を追いかけるのだ。それは風呂だけではなく，その後のすべての物事に通じていった。祖母は誇り高く，いささか厳格な女性であった。しかしそんな祖母に双子はブロークン・イングリッシュで話すことができたのである。祖母は「私，とてもブロークン・イングリッシュなの」と言った。
祖母はふくよかな女性だった。腹部が膨らんでいて，長い灰色の髪を後ろで束にしていた。双子はボタンを開けたり，チャックを下げたりする二人の若い召使いのように，祖母のところにやってきたが，たいていは祖母の重苦しい脇の下の脂肪やメタルの留め金のある堅く厚いピンクのコルセットや，真ん中のレースでとめた十字架などにうっとりと魅せられた。双子はそれぞれレースの端をとって，ゆっくりとグイと引っ張ったり，

ホックを外したりして，部屋を横切って次第にのびていくコルセットのひもに祖母をくっつけた。

祖母はいつも木綿の長い布切れを持って風呂へいった。それは体を洗うための手ぬぐいで，日本語で書かれた文字やデザインによって装飾されたものだった。湯船では薄い布は，祖母の年老いた体の脂肪の襞にくっつき，透明な熱い湯の中で日本語の文字と織物の端が次第に消えていく。祖母の腹の周りの，窮屈なコルセットで刻まれた，堅い×印や皺が膨らんだり消えたりするのを見た。

祖母は顔から洗いはじめ，踵までのすべての体の表面を洗い，「手ぬぐい」という布を様々な方法で使い，このような単純な布の優れた多用性を見せた。祖母の背中を，両方の端をもった手ぬぐいがシーソーのやり方で，肌の一インチ一インチを磨いていく。手ぬぐいは滑らかな繊維の表面をもつ柔らかな丸いスポンジにもできた。祖母は，しみのある肌で弛緩している層や垂れた胸の下や周りを，円を描きながらこすっていた。終いにあっという間に乾かされ絞られた手ぬぐいは，水分を吸収し，体全体さえも乾かす用途にも使われていた。それから祖母は湯気の立った湿った体のまま湯船の外に立ち，額の汗を拭うのだった。湯船の中の祖母と手ぬぐいは単純にそれ自体完璧なものに見えた。

そのあと祖母は顔にクリームを塗り，その長い灰色の髪をとかして編んだ。そして双子は大きなダブルベッドで，三人でやる運動の集まりのためにパジャマで祖母のところに加わった。それは頭を回して肩を丸くすることから，ベッドで横になりながら逆さで自転車をこぐ動作まであった。三人はこれを一緒にやって，同時に祖母はこれらの運動の即効性について説明した。「これ，足にとてもいい。ほらね。年とっているから，もっといい」と言った。

祖母の手ぬぐいを再び見たのは，日本にきてからそう何年もたたない頃だった。というのも実際に風呂で老いた肉体を再び見るのは何年もあとのことであろうと彼女には思われたからだ。これは祖母が入浴しているのを見ることがなくなったということではなく，日本の公衆浴場での湯気や，しゃがんで押し合いへし合いすることから発せられるなじみがあって親しみあふれる活気ある感覚から，日本における風呂を再発見したということなのである。双子の一人に公衆浴場―銭湯―をはじめに紹介したのは，母方の大叔母八重であった。

2.

彼女は京都に二月にやってきた。この時期は京都古来の荒涼とした感覚をもつ寒さがあった。彼女は21になったばかりで，秋から東京で日本語を学んでいた。家からこんなに離れたことはなかった。

彼女の大叔母八重とそのつれあい，千博は職を退いてから古い家に住んでいた。それは磨かれた木と破れた障子紙と敷物がある古めかしい小さな家だった。疲弊した暗い時

代を経た家で，千博が帝国軍の将校であった時の戦争を経過し，今や結婚し出て行ってしまった子供たちの誕生を迎え，戦争の辛辣さやその後の貧しさを経過した家であった。

しかし彼女（双子の片割れ）は，このような過去の少ししか理解しておらず，それは彼女自身が，昔話の中に入っていくように見えたのである。それはこのようにしてはじまる―「昔々，大昔に，丘のふもとの小さな家におじいさんとおばあさんが住んでいました・・・二人は貧しく，たった二人で生きていました。そして子供はおりませんでした。毎日おじいさんは薪を売るために木を伐りに出ていき，重い束を背に，雪のなかをとぼとぼ歩いていきました･･･。」これが繰り返し語りつがれる話の単純な始まりであった。それはつつましく，物事の道理を悟りきった生活をする老夫婦の，悲しくも優雅で，魅力的な話のように見えた。

彼女の年老いた叔父は耳が遠く，八重はその耳に向かって叫び続け，彼が忘れてしまった様々な細かいことを思い起こさせたり，姪が言ったことを繰り返したりした。一方八重はどちらかというと目が悪く，分厚い，金属でできたメガネから目を細めてものを見ていた。八重は鼻先から２，３インチはなれたところから新聞や手紙を読んでいた。時々姪は八重が皿を洗い，顔から数インチ離れたところから椀や湯飲みを点検し，メガネをかけなおし割れ目やシミなどをつついたりするのを見た。

八重は，自分とおじさんはお互い離れることができないと言った。そして笑いながら自分たちは漫画のキャラクターのようだとも言っていた。ある日八重は屋根に雨の音を聞き，夫に雨が降っていると告げた。千博は新聞から目を上げてこういった。

「そんなはずないだろう。何も聞こえんぞ。ほら，今日は雨じゃない。お前が間違っているんだ。」

八重は玄関へ行って戸を横に滑らせた。外をみると何もなく，結局雨は降っていなかったと確認して戻ってきた。八重は台所へ姿を消していったが，年寄りの好奇心から夫は戸口の方へ向かっていった。外をみると雨が降っているのが見え，妻を戸口へ呼び寄せ，その手を引っ張り雨の方へ差し出した。二人は戸口で庭とそこに降り注ぐ雨を見て，笑って立っていた。

八重は戸口に自分の姪のために古い木の下駄を置いた。下駄は外側の踵の部分があまりに擦り切れていたので，彼女は八重の内股の早足を真似て，不器用に歩かなくてはならなかった。八重は，石鹸とシャンプーと櫛と，一緒に折りたたんだ手ぬぐいを置いた小さなプラスチックの桶を彼女に手渡した。二人は外へ出た。少し雪が降っていて，それが下駄の周りの砂利に消えていった。詮索好きな隣の人々に対し桶ごしに会釈しながら，八重は彼女を銭湯へ連れていった。

八重はそこで幾重にも着込んだ着物を下に落とした。そしてやせて年取った体の胴の部分がふくらみ，皺が寄っているのを見た。八重は裸のまま，ちょっと前かがみになりながら，分厚い金属のメガネで自分の持ち物を確かめ，すべてをたたんで小さくまとめた。

八重と彼女はガラスの戸を横に動かし，渦巻く暖かい湯気の中を泳ぐように進みながら，プラスチックの桶を握って風呂に入っていく。列をつくってしゃがんだ女性や子供

が，湯の流れる蛇口の前で体を洗っている。八重は列の間と，あふれ出る湯の騒音との間に，彼女を連れて行った。こぼれる湯の音を響かせている女たちは熱気で赤くなり深い浴槽から湯をしたたらせて出てきた。他は，大きな湯船に深くしゃがんで背筋を曲げて肩を優しく通る湯を静かに受けていた。落ちた髪の黒い束が頬や首に張り付いている。２つの空いた場所を見つけたあと八重は熱い湯船につかるためにそちらへ行った。

いろいろな年齢と体型の女性が手ぬぐいで体をこすり，忙しそうに体を洗っており，その動作は活気にあふれ熟練していた。女たちは跪いたり，しゃがんだりして，タイルには決して座らず，桶を湯で満たし滝のような湯を，周りにかからないように自分の体のみにかけた。体を伸ばしていたり，立っていたりした女性はすべて，湯船や蛇口の前でこじんまりしてうずくまった姿勢になった。

風呂の明るい光の下で，女たちの肌は美しく透き通った白色となり，滑らかで豊満な肉体は，太ももや臀部が張り，胸のところが小さく丸くなっていた。彼女は背をこちらへ向けた女の，曲がった背中から首のうなじまで見て，自身の背中から手ぬぐいをとり，自分の肩を見て，顔を赤らめた。

彼女の隣にいる女性は赤ん坊と一緒に膝まずいている。その女性は赤ん坊を優しく洗う。まえかがみになって，子供の頭を手で支えながら，腕を曲げて抱えていた。胸は授乳するために腫れ上がっている。赤ん坊はずんぐりした腕と足をばたつかせ，蹴ったりしている。

八重は今度は自分のところでしゃがみ，力強く体をこすっている。八重と他の年取った女たちは，疲れることなしに，年齢を示すような脆弱さなどなく，難なく跪きしゃがんでいる。小さな体を折り曲げた年老いた女たちは，自分たちの肌―かつての豊かな光沢は擦り切れた硬さに消えていってしまっており以前は太って張っていたが，今は薄く弛緩してしまった襞のある肌―をこすっている。若い女が湯から上がり，その丸々と太り上気して光った体で，子供と一緒に前へよたよたと歩いている。

八重は姪の後ろにしゃがみ，彼女の背中を洗うことを申し出た。八重は母親が自分に対して以来感じたことのないほどの強さで彼女の体をこすった。しまいにはよく磨いた背中に湿った手ぬぐいを広げ，八重は滑らかに流れる湯をかけたが，それは布を通して密着してきた。八重は下から肩にかけての手ぬぐいを気をつけてはがすと，彼女の古い角質がはがれていった。

彼女が八重の背中を洗うためにこっちを向いた。八重が自分にしてくれたように洗えないので彼女は躊躇する。八重は目を細めで笑い，そんなこと関係ないよと言い，姪から手ぬぐいをとり，自分の体を洗い続ける。八重は，自分の力で変えることができない物事に対してや，素直さやプライドを剥奪するような感情に浸るのが嫌であるように，そうぶっきらぼうに言った。八重は無愛想であったが，それは相手の正直で（背中をうまく洗えないという）乏しい能力を知る以外に相手を憤慨させることがないような，そんなちょっと皮肉のあるユーモアを伴ったものなのである。

風呂には子供たちがいる。可愛い女の子がいて，湯船から母親のところまで濡れたタ

イルの上をよちよちと歩き，そして祖母と思われるもう一人の女のところまで歩いていった。その子の小さな突き出たおなか，やせた肩そして黒い目をみると，その女がその子の祖母であることがわかる。

八重と千博に会うために京都につく前，彼女は伊勢に一人で行き，一か月半の旅行のための必需品すべてをいれた小さな青いリュックを背追っていた。伊勢半島での日々は寒くヒヤリとして，空は深青であった。彼女はふと何も話さずに沈黙して旅をしている自分に気づき，そして周囲の会話や騒音に耳を傾けながらも，誰にも気づかれない観察者であろうとした。それは景色の背景や，描写できない心地よさに消え入っていく，平凡な日本人の若者になるということでもあった。景色の漠然とした不明瞭さへ溶け込もうとする試みの中で，彼女は自身が，他の誰かが彼女のことを実際に気づいているとか，そのことに関して何を言おうとしているのかに対して，感受性の鋭い観察者になっていることに気づいた。彼女は一人になり，観察者になりたかったが，自身のこの状況に対する強い恐怖心をとめどなく感じていた。すなわち旅行している日本人の学生の役を演じていながら，彼女が自身の偽装（実際は日本人ではなく日系アメリカ人であること）が成功するのかどうかを知りたがったり，それが失敗してしまう根跡に対しての怒りなどに彼女はとりつかれていたのである。彼女は伊勢の偉大なる神道の神社へ一人で巡礼にいき，ヒノキの老齢の木を通って沈黙の中で歩き，イスズの清水で身を清めるために他の人とともに立ち止まった。

神社を出ると，彼女は，旅行をする若者に場所を提供するために，最近開放している小さな仏教の寺を見つけた。彼女はその夜そこに泊まったただ一人の人間だった。

二人の小さな子供―男の子と女の子で，黒い目をしたかわいらしい子達―が彼女の部屋の窓に寄りかかっていた。子供たちは裏道のほうにあわてて走っていき，戸口の端にもたれかかりながら恥ずかしそうに立っていた。子供たちの声は，彼女がすでに忘れてしまっていた優しさでゆっくりと沈黙の旅を満たしながら，彼女の部屋の雰囲気を和らげ始めた。子供たちは，立ったり座ったりし，肘に寄りかかりながら低いテーブルに顔をつけたりして，彼女が持ち物を紐解くのを好奇心をもって見ていた。

「本当にアメリカからきたの？　本当なの？」
「いや，そんな風に見えないな」
「ちがうよ。うそだよ。そうだよね？」
「英語教えてよ。僕の妹は学校で英語を習ってるんだ。」
「はやく，英語教えてよ,」
「なんか言ってよ。」

そしてあたかも他の物事への好奇心が注意をひいたように，子供たちはそこからいなくなった。彼女は興奮した声で子供たちが立ち走っていくのを聞いた。

彼女は夕日の最後の光の下で，体を温める猫のように戸口で長い間立っていた。彼女

のいる二階の縁側の下に，妊娠した女が着物を干していて，濡れた衣類に竹竿を通していた。そして彼女の膨らんだ洗濯の袋を日光にさらし，手を伸ばしていた。その女性は宿屋の主で，先ほどの二人の子供たちは，彼女の子ではなく隣人の子供であると言った。主人の女は，旅行者である彼女の邪魔をしたことで，子供たちを優しく叱った。

しかし女が出ていくと子供たちはまたやってきて，今度は友達をつれてきてもっと強引になっていき，少し前に来た時とのほんのちょっとでも変化があるかどうかをしらべようと部屋に入ってきた。

「ほんとにアメリカからきたの？ホントに？」
「英語話してよ。はやくはやく。英語おしえてよ。はやく！」

若い女の声が遠くから聞こえてきた。女の子だけが戸口でぐずぐずしていた。その子はポテトチップの小さな袋からチップを食べていた。「これポテトチップだよ」とその子は彼女に言い，小さな袋を渡して出て行き，他の子供たちを呼びながら走り去った。彼女は残りのチップを食べながら，もうしばらく戸口に座っていた。そして冷たい空気と影がゆっくりとやってきた。遠くアメリカでは，祖母が最期の時を迎えている。母親が手紙にこう書いてきた。

「おばあちゃんが毎朝起きて『まだあたしは生きているのかい？』って言うのよ」

その宿の女主は，廊下を横切るついでに障子の戸を開けた。女主の顔は濡れた桃のようにきれいに輝いた。風呂の温かさは女主人の体や髪の湿り気から発散し，彼女の腹は編んだドレスの下にあるお腹の中の子供の重さで風船のように丸くなった。彼女は言った。

「もうお風呂に入っていいですよ。」

裸になって，八重は湯気のついたガラスのドアの方へ早足で進み，外へ出た。波のようにうねった蒸気が彼女にまつわりつき，そして彼女もそれにまとわりついていった。

3.

路傍の宿屋で，若い男が小さな風呂へ忍び込んでいった。服を着ていようがいまいが，日本ではその男は「外人」であり，青い目と茶色い髪，長い鼻の下に針のような口髭があった。日系アメリカ三世の女はすでに風呂に入っていた。女はちょっとの間，男を無視し，彼の方に背を向けて風呂の角で体を洗っていた。女は桶と石鹸を渡し，男はもうひとつの隅に座りこんだ。

すぐに男の体は石鹸と髪の毛でいっぱいになり，桶で頭に湯をかけながら，一人でペ

らぺらしゃべっていた。男は湯気の立つ湯船から木の板を取り去り，風呂へ入っていった。頭だけが湯船の上にひょこっと出ていた。小さな滴が額やひげから落ち，男は目を細くした。そしてこう言った。

「あのさ，僕はきみをオードリー・ヘップバーンみたいだと以前は思っていたんだ。どういう意味かわかるだろう？僕が言いたいのは，ヘップバーンがどのようにみえるかとかいったような，そんな意味じゃない。ヘップバーンは素朴で，言ってみるなら純粋無垢というのだろうけど，彼女はバカではない。ほんとにいまいましいほど頭がいいんだ。君がこのことをどれほど理解しているかどうかわからない。僕はこれ以上確信がもてないんだ。でも君はヘップバーンよりももっとコケティッシュだ。実際にとてもかわいらしい日本のメイドさんになれるだろうね。」

女はシャンプーの泡がこぼれた中から彼を見上げた。男は物珍しそうに微笑んだ。メガネをとると，彼は何も見えなかった。女は髪を湯ですすぎ，風呂場に水を播いた。男は湯船から上がり，手ぬぐいで体を拭き，前かがみに歩いていった。

女は体を洗い続けた。女と男は週末に一緒に旅行するため，ここに来ていた。男は富士山の近郊の湖の一つで釣りをしたがったのだが，到着してから雨が降り続いていた。そのかわり宿屋の六畳の間でトランプをしたり，本を読んだりした。晴れそうだったら，散歩に出ていき，泥だらけでびしょ濡れになって一緒に帰ってきたり，ゴムの服を着た漁師がいる湖の近くの二つの茶屋の一つに座り，茶をのんでいた。宿屋の人間のほとんどは給仕をし，失礼にならない程度に彼らを気に留めないでいたが，主人はどちらかと言うとぶっきらぼうだった。ときどき店の人は彼女にはじめに気づいて，通訳をしてくれると思って彼女に話かけた。男は嫌がらないようにし，彼女の方は決して男のかわりに答えないようにした。

女は湯船に入った。男は風呂に入っている間，彼女に対する様々に変化していく印象を細かく説明した。男は頭の中でごちゃまぜにし続けている物事が，彼女の神秘的な雰囲気や魅力であることに気づいたのだ。週末を通して男は幾度もふさぎ込み，混乱していた。単に男は恋をしているのだが，彼女が彼に恋をしていないことを認めたくなかったのだ。彼女の好意には何か脅威的で冷笑的なところがあった。

外国へやってくる理由を勝手に決めつけることはできないが，おそらくそれはエキゾチックな人々や，遠い昔の美しい光景を探すためである。たぶん男はオードリー・ヘップバーンを探しに日本にやってきたのだ。なにか品格のある，無垢で優雅なものを探しに・・・。そうした男を軽蔑するのはよくない，なぜなら男だけでなく女も同じ理由でやってきているのだから。そして他の人間が彼女に同じ特徴を感ずるかもしれないと考えるのはうれしいことだった。男は女が心から望みたいと考える幻想を作り上げていたが，男の念入りな説明が，究極的には陳腐であることがわかり，彼女は男の観察眼や感受性をも信用することができなかった。彼女が自分では自然と感じていた素朴ささえ，男の無垢な世界に皮肉な一瞥を与えることになったのである。

男は小さな白い粘土の猫を買った。それは日本の食堂や店で客を招く大きな招き猫の４インチぐらいのレプリカであった。その白い猫は，大きな目と招く手で正座していた。

猫は小さな鈴のある赤い紐の襟を持っていた。男は床の間に猫を置いた。男は白い猫を飼った，なぜならそれは彼女を思い起こさせるからだ。

彼女は，その濡れた体を宿屋が用意した「浴衣」に滑り込ませた。部屋で男は眠っているようだった。彼女は明かりを消して床の近くに敷いた布団の下に滑り込んだ。何かがもぞっと動いた。歯を磨くために男は出て行った。

突然, 彼女はたくさんの布団の下で息ができなくなり, 布団のずっしりした暗さとぴったりとくっついて抱きしめる男の体で身動きが取れなくなった。笑いながら，彼女は身をよじり外へ出ようと手探りをし，投げ飛ばされた布団の上で息を吸おうとした。二人は転がった。彼女の手は布団のマットの乾いた切れ端に手を伸ばし，ひじを縮め，渦のようにうねる浴衣を押しやった。そこから逃げて，彼女はマットの上に膝づき，男を見ていた。男は布団の山を投げて作り，それを彼女の方へ投げつけた。「昔，妹にこんなことをしたことがあったっけ。」

男は布団を揺らし，寝具のあるところに扇形に広げ立っていた。「君を風呂で見た時，僕に背を向けて座って，髪の毛を頭の上にまとめていたね。その時君がどのように見えたのかわかるかい？君は浮世絵のようだった。まるで風呂にいる浮世絵の女のようだった。」

４.

９月の終わりに，双子は日本で再び一緒になった。一年後に双子のうちの一人は出ていくところで，もう一人は一年間の勉強と旅行のために日本についたばかりだった。

彼女は，もう一人の片割れと下の風呂に来ていた。そしてその片割れに対して，今では自分には極めておざなりになっている色々な形の桶や蛇口の使い方の手ほどきをしていた。子供の時から長く一緒に風呂に入っていたので，気がつくと子供のころのように自分たちは小さな風呂の暖かさの中にいて話していた。

双子の片割れはより母親の体型に似ていて，胸が大きく足が細かった。彼女を見ていると，美しかった母親の体つきがどんなだったのかを思い起こさせられる。この片割れと母親は，現実主義や実用的見解において似かよっていた。双子は最小限の期待の目をもって互いに前へ進んだ。双子の片割れは生意気な華やかさをもって挑戦するかのように，率直でありのままの力を受け入れる母親のように。そして彼女らの人生を変えることになる時間，人々そして環境を伴って――二人は自分たちの周りにある出来事をより早急により素直に体験しているように見えた。なぜならば彼女達の表面上の見解はより広範囲にひろがり，より完全なものになるからだ。彼女らの反応は沈黙でみたされたもの，あるいは言葉で表現されたもののどちらであろうと，その瞬間はそのままであり，それは過去形で考えられるような感受性や可能性を通した焼き直しではないのである。

一年後に双子が再び出会ったが，それは新しい転機となった。彼女は以前のある時期における双子の片割れの中に自分自身を見ていた。たしかにもう一人がどのような変化や時を過ごしてきたのか完全には知らないままではあるが・・・

そして彼女はこんな風に言うのだろう。自分は日本に気取らないものを探しにやってきたのだが，それは自身の感受性や彼女の周りの物事が，彼女が考えていなかったように，そして容易に切り捨てたり無視することのできない方法で複雑になっていったまさにその時に，それ（気取らない自然なもの）を探しにやってきたのだと。そして彼女は日本へ帰ることが，象徴的なニュアンスで行われる儀式として，またそれは生活していたある人生における時期にただ単純に戻るというのではない過去への回帰として考えていたのだと。ある部分では彼女は祖母達が知っていた生活に対する感受性を再び取り戻したかったのだ。

彼女は双子の片割れに，奈良で旅をしている間に出会った青年のことを話した。名前はモトと言い，その男は車を持っていて週末に軽井沢へ連れて行ってくれると申し出たのである。

一人で伊勢半島をぶらぶらした後，電車で奈良に到着し，彼女は駅でバックパックを背に，手にピンクのスカーフでできたバックをもって地図を解読していた。そこに威張りちらした，ガリガリにやせたクボ・モトが，彼女の足元にバックパックを投げ落とし，彼女を道に迷った16歳と思って，行く方向を教え，ぶっきらぼうに出しゃばって電話でのホテルの予約をしようと，彼女の前に進み出てきたのである。彼女はこういうのは嫌だったが，甘んじて彼の援助を受けることにした。その上，モトは彼女の素性（日系アメリカ人であること）を推測することができなくて，その遊びが彼女を愉快にさせていたのである。同じように彼女はモトを，英語をいい加減に話す，英語の知識がわずかしかない18歳の高校生の旅行者と思った。そしてこのことは彼女の日本語の拙さをモトが発見した時，彼女が自分を見くびっていたのだと後で言いあいになることにもなった。

二人が曖昧な素性のままでいるという状態は，その素性を隠すという遊び以上に，お互いの驚くべき告白を冷やかすという遊びになり，それで少しばかりの時間が経過してしまっていた。モトは，この旅行の前の年にヨーロッパに滞在していた24歳の大卒の青年で，ビジネスの世界（会社）へ戻る準備をしていたのである。

自分のことを説明するのは彼女には難しく，しまいには，遊びでほのめかしたあらゆる推察が説得力のないものとなった。ただ単に彼女はアメリカ生まれであるということではないのだ。しかし彼女の通常の服や見かけがかなり若いということは，いやいやながらも認めなくてはならないものだった。実用性のためにスタイルを，そして表現しえないものに対して目立った異国の性質を犠牲にすることで，彼女は洗練した直感や方法が欠け，どちらかというと子供っぽくなっていたのだ。日本におけるこの手の洗練さとは，彼女の長い髪を切り，化粧をすることがおそらく必要とされるであろうが，それは彼女にとっても嫌なことだった。彼女には自然であることに関する根本的な考え方を維持することが必要なのだ。しかし，これに加えて周りと同じであるという急を要する，奇妙な必要性もあった。皆と同じであることがどうやらみとめられるように見えたとき，彼女は受け入れられたという心地よさを感じ，しばらく中国人であったり，韓国人であったり，混血であったり，アメリカ的趣味をマネする人間であると考えられる屈辱から逃

避することができたのだ。そしてそれはしばしばこれらの推察を伴った粗野なやり方や，探索好きな態度以外なら，屈辱的ではないはずのものであった。

とても興味深いことに，変装とはアメリカ的なもの，すなわち日本とは関係のない様式や物腰を捨て去ることによって起こりえるものであった。アメリカ人の，自分たちは（他の国の人間より）経験があると考える自負は，日本では愚かしいものであった。こうしたアメリカ人としての意思表明を捨てた日系アメリカ人三世は単にありきたりの日本人であるように見えただろう。しかしこのことは，彼女が他の習慣の組み合わせを帯びていく必要性があり，彼女のそうした変装の流儀のほとんどが，十分に無垢で無口な日本の少女のもの―それは彼女が言葉を話すのが難しいことによるものではあるが―になっていった。少なくともそれは他の人が近づきやすく，あるいは取るに足らないものと思う表面だけの様式だった。模倣や真似でさえ，気取りや正直でないことを超越した一種の快適さがあったのである。

八重は「大根の花」という言葉の意味を説明した。大根の花は緑の葉の房に見える小さな花以外，彼女の表現を使うなら，全く「何もないもの」なのだ。しかし土の下の見えないところでは大きな白い根，大根がある。大根とは，大きくて白い株で，キレのいいピリッとするレモンのような，しかし酸っぱくはなくもっと甘い資質をもった，あぶったり，美しく切り分けられた魚とともにある添え物として知られているものである。八重はこう言った。

「昔，ある女の子達を『大根の花』と呼んでいたけど，今はそんな女の子などいないね。もう大根の花はなくなってしまったね。」

彼女は八重がそんな「花」であったことを知っていたが，彼女はといえば，八重が心に抱いているようなものとは自分は違うと思っていた。

彼女は初め，日本の女性に関する言葉で様々な表現を，試しに面白がって使ってみた。次第にこれらの表現や様式は，ほとんどの会話において自然になっていった。二つの文化における役割をうまく演ずることができることは両方の知識において先んじている徴になったのである。心のイメージが推察しうる以上のことを周りの環境に対して知覚するという秘密の喜びというものがあるが，それは言い換えるならば，結果的に自分がより経験していることを知る喜びでもあるのだ。

したがって彼女自身は，訝しく思いながらも，モトに対して，その年齢によって確信できる成熟さに関し，そこから何が出てくるのかを再び見るために，この青年に対する疑いを一旦脇へおくことにした。モトが先に見せた尊大さは，この成熟さを念頭にいれたもののようだった。とにかく彼女とモトの二人は奈良の三日間の旅で一緒にいることにしたのである。

奈良ではその週に，軽井沢のリゾート地の小さな別荘が何百もの武装した警察に包囲された。丘のところにある別荘の中では，日本赤軍のメンバー，小さなマルクス主義の

軍団が，女性を人質にとり，その間警察は別荘を攻撃するために，消火用のホースで水の激流を送っていた。これは雪の降る山腹で行われた小さな闘争であり，警察は火炎タンクの後ろでライフルをもって座り込み，人質の夫はマイクから谷に向かってこう叫んだ。

「お願いです。妻は病気なんです。私を人質にとって妻を離してやってください。」

モトは別荘の若者に同情していた。モトは赤軍の若者は待って，そして戦うことしか選択肢はないと言った。なぜこんな事態が生じたのか説明できなかったが，赤軍の若者は死ぬしかないと言った。若者達は，警察か法廷の裁きによって命を落とすことになるだろうと。

長い週末の後，警察が最終的に入り込み，何人かの若者を殺し，何人かを捕まえ，女性を救った。後日談は，以下のような不気味な話となって露見した。それはどこか他の山荘で起きたことであり，赤軍のメンバーが，私的な方向へ向かう権力ゲームにおいて互いに争い，それは一人ずつに対する組織だった粛清と仲間の埋葬にまで及んでいった。妊娠した女性も死を免れることができなかった。その女性の兄弟は殺された。そしてその体はバラバラにされ山腹に埋められた。若い女が集団を率いていた。女の地味で厳しい顔が新聞のいたるところからじっとこちらを見つめていた。女を辛辣で怒りに満ちたものにさせているのはその地味な顔立ちだとも言われていた。

軽井沢は，結局のところリゾート地で，モトの家族はそこに小さな別荘を持っていた。風の吹きすざぶ高速を5時間もの長時間にわたって運転することは退屈で疲れることだった。双子の片割れは前の助手席に座るのを拒み，しまいにこういった。

「あいつ運転のしかたをわかってないわ。ほんっとに！　ギアをゆっくり動かすことさえできやしないじゃない。事故にでも遭わせるつもり。いったいあんたどこでこんな奴つかまえてきたの？」

この双子の片割れは，わざわざ彼女の考え方を邪魔するために日本へやってきたのだがこのことで，彼女の中で何か―昔からある強靭さ，敵意さとさえいえるもの―が勢いよくふき出した。つまりゲームのような騙しあい，そして真似をしたいという衝動のために，この青年に出会い，彼を受け入れたのだということを理解し始めたのである。たとえ彼女がこの判断を保留しようとしたり，他の価値観の一式や決めるべき規範を許そうとさえしても，もうそのように確信することはできなかった。彼女はこのモトなる人物が誰であるのかわからなくなったのである。

山荘は丘のずっと上にいった木の周りに孤立してある多くの家のうちの一つであった。それは下の泥道を見下ろす丘の中腹に押し込まれているように見えた。彼女は豪華な二階建ての山小屋と想像していたのだが，それはどちらかというと二部屋の簡易台所を設備したもので，コンパクトで都合の良いところであった。三人は生活必需品を見つ

け出し，彼女は食料をいい加減に，奇抜な可能性の範囲で，すべてのものを全部一緒に料理することをとても楽しく感じた。彼女は自分の工夫の才とキャンプのように自分自身で取り決める自給自足感を楽しんだ。

双子は一緒にずっと話していた。双子はモトを一人ぼっちにした。実際二人はモトがいなくなって欲しいとさえ願い始めてさえいた。モトは初め双子を見分けることに混乱していた。こうした混乱の初めに起こる滑稽さはもうとっくに過ぎていったとしても，モトは，自分の知覚能力における分裂が大きくなることか，神経質な力を発散する必要性からかで，混乱したり，結果として冗談を何度も言ったりした。これに対し彼女の双子の片割れは，退屈や嫌悪感を隠す人間ではなく，そしてモトの方は，自分自身のあからさまな未熟さを隠すことができなかった。モトの尊大な自信は，気まずい和やかさと，日本人が理解するには素朴すぎてかつては面白かったが今はつまらなくなってしまった冗談へと消えていった。

台風がテレビで報告されていた。こちらへ近づいてくる可能性があった。リゾートシーズンは完全に終わっていた。彼らはそこのエリアで唯一滞在している人々であるように見えた。何もすることがなく，雨が別荘の中の彼らをとじこめようと脅かすように降っていた。彼らは窓に板を立てて，長い嵐の夜のための用意をしていた。

彼女は食事を作り，その片割れは眠っていた。モトは風呂の用意をした。流しから戻ると，彼女は大きなバーンという音を聞いた。そしてモトの体が風呂場から後ろ向きになって飛び出してきた。モトは驚いて目が大きくなり，火やガスを口から噴いた。ガスが少し漏れたのだ。外側の髪の先はちりちりになって顔の下に波打っていた。運がいいことに腕は覆われていた。モトは火傷をしていないが，彼女はこのモトの「余興」に神経質になった。雨がずっと降っていた。

双子は同じ風呂に一緒に入っていった。双子の片割れは，降り続き，増え続けていく雨の音に全く気付かないかのように，すべての話題を活気あふれてとめどなく話しているように見えた。風は板張りの風呂の窓の外で，激しく吹いた。雨は薄い壁に断続的に降り，ブリキの覆いに対して狂ったようにカラカラと音を立てた。蒸気と湯のクローゼットの中で，双子は泡を飛ばし吹いたりした。双子の片割れはもう一人の後ろにしゃがんで背中をこすり，何年も前の出来事や話をして彼女を喜ばせた。そして彼女は，蒸気のクローゼットである風呂場に反響する，次第に増していく嵐の唸り声と，暴力的な大混乱を聞き取ることができた。彼女は丘の別荘の不安定になっているくさび止めがぐらついていることと，地面や泥や樹木が滑りやすいということを思った。そして彼女は二つの裸で泡だらけの体を埋め尽くすことになるかもしれぬ大洪水や土の塊のことを考えた。

彼女の双子の片割れはモトについてこういった。

「どこであいつ拾ってきたの？あんたって，いつだってだまされるんだから。あいつは自分がすごくかっこいいと思いこんでいる青二才の日本人の男よ。全くガキなんだか

ら。あの事故にあってから，車に乗ることがトラウマになったわ。変速レバーも操作できないじゃない。あんなのとドライブするなんて，あんたほんとにヤバいわよ。」

彼女は後ろにしゃがんで，双子の片割れの方向をくるりと変えた。そして彼女の背中に湯を掛け，八重が以前にやってくれたように手ぬぐいを肩からはがした。彼女はモトが愚かであるにちがいないと認め，双子の片割れの声がタイルや木に強く反響して荒れ狂う嵐よりも激しく，あるいはやさしく，（モトに向かって）大きく聞こえることを愚かにもねがってさえいた。しかし彼女の心には，風呂の部屋を押し分けて通る泥の壁のおしつぶされそうな重みと，そのぞっとするような死といった突飛であてにならない出来事と，その死に対する面白くもない皮肉が心の中に浮かんでいた。

彼女は湯気の立つ風呂の部屋から出ると，モトは上を見上げ言った。「台風はかなり近くを通過するようだね。おそらくそれるだろうが，そうすると僕たちは真ん中にいるかもしれないな。」モトは小さなメモ帳にありふれた日本の形を書き，自分たちがどこにいて，どこに台風があり，どこを通過し，通過しないのか，そしてそれはいつなのかをラジオ放送からくる信憑性を伴って描いてみせた。そしてモトは彼女を見たが，その顔はふざけたように真剣になり，そして次に単に滑稽になっていった。

「たぶんこの家はこの丘から下へ落ちていく…いいや，この家はそれよりも強いかもしれないな。僕がもっと心配しているのは下にある車だ。もし車がスリップして下に落ちたら，僕らは外にでることが絶対できないな。」とモトは目を荒々しく輝かせて微笑んだ。「たぶん僕たちは死ぬだろう。」

彼女はモトを嫌悪に満ちた目で見つめた。

モトは続けた。「でも，どんな場合でも，僕は幸せだ。まるで僕たちは心中しているみたいだしね。」

5.

彼女はまだ日本にいる双子の片割れから今日手紙をもらった。今この双子の片割れも一人で旅行していた。指宿（いぶすき）と言う九州の小さな浜辺で見つけ，そこで砂風呂をしたと書いてきた。潮が引くと，年をとった女達が砂に体を沈めにやってきた。砂の下の，その深淵な隠れた水源から温かい泉が湧いて出てくる。

母親は庭で草むしりをするために朝早くでていき，体が火照り泥だらけになって帰ってきた。母親は自分に最も喜ばしいことを与える事　ー風呂ーに入るために部屋に引き下がっていった。今母親はメガネをなおし濡れた髪をタオルにくるんで立っている。

「まあ」と彼女は言った。「あんたの姉さんからの手紙よ。なんて書いてあるのかしら？」

日本大学商学部『商学集志』『総合文化研究』の編集及び発行に関する要項

平成24年５月24日制定
平成24年４月１日施行

（趣　旨）

第１条　この要項は，商学部（以下「本学部」という）における商学，経営学，会計学及びその他関連領域に関する学術の発展に寄与することを目的とした『商学集志』,『総合文化研究』の編集及び発行についての必要事項を定める。

（発　行）

第２条　『商学集志』及び『総合文化研究』の発行者は,商学部長（以下「学部長」という）とする。

２　『商学集志』は年４回,『総合文化研究』は年３回発行する。ただし，次条に定める『商学集志』『総合文化研究』編集委員会（以下「編集委員会」という）が必要と認めたときは，この限りでない。

３　『商学集志』及び『総合文化研究』の英文表記は，次のとおりとする。

①　『商学集志』　JOURNAL OF BUSINESS, NIHON UNIVERSITY

②　『総合文化研究』　JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES, NIHON UNIVERSITY

（編集委員会）

第３条　『商学集志』及び『総合文化研究』の編集，発行業務を行うため，商学部研究委員会内規第10条に基づき，本学部研究委員会に編集委員会を置く。

（編集委員会の構成）

第４条　編集委員会は，次の者をもって構成し，委員及び幹事は，学部長の承認を得て委員長が委嘱する。

①　委員

⑴　委員長　１名

⑵　副委員長　２名

⑶　委員長が指名する者　若干名

⑷　研究事務課長

②　幹事　若干名

（委員長及び副委員長）

第５条　委員長は，研究担当とする。

２　副委員長は,委員長を補佐し,『商学集志』及び『総合文化研究』の編集責任者とする。

３　委員長に事故あるときは，副委員長又はあらかじめ委員長の指名した委員がその職務を代行する。

（委員の任期）

第６条　委員長，副委員長及び委員の任期は，１年とする。ただし，再任を妨げない。

２　補充の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

（編集委員会の招集）

第７条　編集委員会は，委員長が招集し，その議長となる。

（投稿資格）

第８条　『商学集志』及び『総合文化研究』へ投稿できる者は，本学部専任教員及び指導教員から推薦された日本大学大学院商学研究科在籍学生とする。

２　編集委員会が認めたときは，前項以外の者を投稿者とすることができる。

（原　稿）

第９条　『商学集志』及び『総合文化研究』の掲載原稿の種別は，次のとおりとする。

①　『商学集志』

⑴　論文（Articles）

⑵　研究ノート（Notes）

⑶　研究資料（Research Materials）

⑷　書評（Book Reviews）

⑸　共同研究報告（Reports of Joint Research）

②　『総合文化研究』

⑴　論文（Articles）

⑵　研究ノート（Notes）

⑶　研究資料（Research Materials）

⑷　書評（Book Reviews）

⑸　翻訳（Translations）

⑹　翻刻（Adaptations）

⑺　共同研究報告（Reports of Joint Research）

２　投稿できる原稿は，各号につき前項のいずれか１編とする。ただし，編集委員会が必要と認めたときは，この限りでない。

３　投稿原稿の執筆形式については，別に定める「日本大学商学部『商学集志』『総合文化研究』執筆要領」によるものとする。

４　投稿原稿のうち論文は，邦文及び英文の要旨（abstract）を付すものとする。ただし，言語については，編集委員会が認めたときはこの限りでない。

５　投稿者は，印刷物と当該原稿を保存した電子媒体に所定の申請書を添えて，投稿締切までに提出するものとする。

（審　査）

第10条　投稿原稿の審査は，すべて編集委員会で行うものとする。

２　編集委員会は，受理した原稿１編につき２名の審査員を編集委員会委員のうちから選任し，審査を委託する。ただし，編集委員会は，投稿原稿の専門領域に応じて，学部内又は学部外から審査員を選任することができる。

３　審査員は，当該審査結果について，所定の「審査結果報告書」を作成し，編集委員会に報告する。

４　編集委員会は，前項の報告に基づき投稿原稿掲載の可否について審議し，決定する。
５　編集委員会は，投稿原稿の種別を変更した場合又は掲載不可と決定した場合は，投稿者と協議するものとする。

（編集及び校正）

第11条　投稿原稿の掲載順序は，原稿の種別，資格別，五十音順とする。
２　掲載が決定した投稿原稿の校正は，二校までとし，発行日の２週間前までに行うものとする。

（禁止事項）

第12条　投稿者は，他誌への二重投稿をしてはならない。

（著作権）

第13条　『商学集志』及び『総合文化研究』に掲載された論文，研究ノート，研究資料，書評，翻訳，翻刻及び共同研究報告（以下「論文等」という）の複製権，翻訳・翻案権，公衆送信・伝達権及び二次的著作物の利用に関する権利は，本学部に帰属するものとする。
２　前項の論文等について複製，翻訳・翻案，公衆送信・伝達及び二次的著作物の利用を行おうとする者は，あらかじめ編集委員会の許諾を得なければならない。

（謝　礼）

第14条　第８条に定める投稿者に対しては，謝礼を支払わない。ただし，第８条第２項に定める投稿者のうち，依頼論文の投稿者に対しては，編集委員会及び学部長の承認を得て，年額５万円（税込み）を限度として謝礼を支払うことができる。
２　第10条第２項ただし書に定める審査員のうち本学部専任教員以外の者に限り，論文等１編につき２万円（税込み）の謝礼を支払う。

（発行媒体）

第15条　『商学集志』及び『総合文化研究』は，冊子の作成とともに，本学部のホームページに掲載する。

（所　管）

第16条　『商学集志』及び『総合文化研究』の発行に関する事務は，研究事務課が行う。

附　　則

この要項は，平成24年４月１日から施行する。